

「大学中退のとらえ方」 ～アメリカと日本を比較して～

2013. 10. 22

関西国際大学
学長 濱名 篤



これまで考えられてきた中退の理由

1) 経済的理由

学費負担能力、学費<期待されるメリット>

2) 心理的・精神的理由

対人関係、大学の環境への不適應

3) 学力理由

高校までの基礎学力不足

学修目的・動機の欠如

学習習慣の未修得による怠学

→これらの個人的理由だけに対応すればいいの
か？ 「中退させる学校(大学)が悪い」？

中退率が低いのは何故か

仮説①教育がうまく機能しているので問題がない

仮説②進級や卒業における質保証が機能していないので誰でも卒業できる

仮説③“中退の危機”を防止するメカニズムが整備されているので中退率が高くない

- 「中退」の持つ社会的“スティグマ”？
- 留年や原級留置を原則として行わない日本の高校
- 通学制→定時制→通信制(退学率統計なし)といった暗黙のバイパスの存在

結果的には仮説②？ 高大接続からの問題

3

米国大学の1→2年学業継続率

Table: National First- to Second-Year Retention Rates by Institutional Type

Degree Level	/Control	N	SD*	Mean %
Two-year	Public	772	12.5	55.5
Two-year	Private	70	27.9	55.5
BA/BS	Public	88	13.0	65.2
BA/BS	Private	353	22.3	67.3
MA/1st Professional	Public	223	12.1	69.7
MA/1st Professional	Private	505	17.7	70.3
PhD	Public	258	15.0	76.7
PhD	Private	274	14.5	80.2
Total		2,543	N/A	66.5

→威信の高い大学ほど中退しない。公私で1年では、中退率に差はない

* Standard Deviation

出典: ACT Institutional Data File, 2012

4

米国大学の5年(3年)以内卒業率

National Persistence to Degree* Rates by Institutional Type

Degree Level	/Control	N	SD	Mean %
Two-year	Public	435	17.9	25.4
Two-year	Private	40	30.7	51.4
BA/BS	Public	56	22.3	36.6
BA/BS	Private	214	23.3	54.7
MA/1st Professional	Public	177	16.9	38.3
MA/1st Professional	Private	388	17.9	54.7
PhD	Public	231	18.3	48.0
PhD	Private	231	18.0	62.9
Total		1,772	N/A	45.4

→公立<私立 低威信大学<高威信大学 と 機関特性で卒業率に開きがある

*Completion in 3 years for Associate Degree; 5 years for BA/BS

出典: ACT Institutional Data File, 2012

5

米国における高校卒業後の大学進学率

Percentage of 18- to 24-Year-Olds Enrolled at Degree-Granting Institutions, 1980-2010

高校卒業者の5割が卒業直後期に大学進学をしている

Almost half of the young people who completed high school are enrolled in an institution of higher education, compared with roughly a third three decades ago. Substantial gains in enrollment were seen among blacks and Hispanics as well as whites.

18- 24歳 年齢層	1980	1990	2000	2010
全体の大学進学率	26%	32%	35%	41%
高校新卒者の進学率	32%	39%	43%	48%

*Completion in 3 years for Associate Degree; 5 years for BA/BS

出典: ACT Institutional Data File, 2012

6

希望するメジャー分野を持った上での 1-2年のGEを履修する米国大学生

将来選択を考えている分野 Probable field of study/major

Professional	14.9%
Business	14.9%
Social science	12.1%
Engineering	12.0%
Arts and humanities	11.0%
Biological science	10.9%
Education	5.9%
Physical science	3.7%
Technical	1.0%
Other fields	7.2%
Undecided	6.4%

*Completion in 3 years for Associate Degree; 5 years for BA/BS

出典: ACT Institutional Data File, 2012

→将来プランを一定程度持ちつつも、入学後1年半~2年は専攻を再考できる

7

日本の中退問題は高大接続の問題

- 高校教育の**質保証の“仕組み”**がない
- 規制緩和で益々わからなくなった**「学位」と「学部・学科」の多様化**
- 増加し続ける**“準備不足学生 (Unprepared Student)”**
- 批判強まる**“正解を択一で○をつける”入試方式**
- 学習指導要領は**「高校教育で教える内容」**であっても**「大学での学修に必要な能力」**とイコールではない

→個別大学の継続的改善努力は必要(時系列改善が重要)

But 高大接続+高等教育の構造的課題解決がなければ解決困難

→「中退」に対するマクロな見方とミクロな見方の弁別

8

初中等教育における Grade Retention (原級留置)

- 原級留置のある国々:アメリカ、カナダ(以上は該当科目のみ)、ドイツ、オーストリア、スイス、オーストラリア、ニュージーランド、イギリス(但、上級学年のみ)
→サマー・スクール等でフォローアップ
- 原級留置のない国々:日本、韓国、ノルウェー、フィンランド、スウェーデン

“修得主義”ではなく“履修主義”の日本の高校教育
→高校教育の質保証は高校長裁量

9

米国大学の中退対策

1983年以降、中退率・卒業率データを集め分析してきたACTによると
学習面・非学習面両方の要因の影響(3度の実態調査結果)

1987年 知的刺激と補助+人間関係構築+キャンパス内での多様な経験を通じて周囲の人間との“関与する経験”



2004年 大学の制度特性より個人の特性に帰する原因

∴ 対策は

- ①初年次セミナー単位化
- ②アカデミック・アドバイジング(チューター・プログラム, 特定学生へのアドバイジング介入)
- ③学習支援(コース・プレースメントテスト、学習支援センター)

出典: “What Works in Student Retention? —Fourth National Survey—” ACT, 2010

大学教育の持つ手段性と 主体的学びの両立は可能

「大学教育の主たる利点は個人の稼金力を増すことである」に賛成

The chief benefit of a college education is that it increases one's earning power
72.3%

大学進学理由 Reasons, listed as very important, for attending college

よりよい仕事に就く為	Get a better job	85.9%
興味あることを学ぶ	Learn more about things of interest	82.9%
特定の職業への経路	Train for a specific career	77.6%
一般教育や知識理解の為	Gain a general education and appreciation of ideas	72.4%
お金が欲しい	Make more money	71.7%
大学院進学の準備	Prepare for graduate or professional school	61.4%
より文化的人間になる為	Become a more cultured person	50.3%

出典 : The Chronicle of Higher Education 2012.10.20

11

中退問題にどう対応していけば いいのか

12

中退のとらえ方はこれでいいのか？

仮説(1)中退させる大学は悪い大学である

仮説(2)中退するのは大学の教育が悪いからである

仮説(3)中退する学生は個人に問題がある

仮説(4)中退すると“人生の失敗者”である

13

中退問題を考える視点

- 入学定員制、転学なしの制度設計が前提
- 高校教育の質保証は必要but大学入試は「高校教育の質保証の装置」でいいのか？
cf.外的基準のない接続
- 大学入学時に多様化し続ける学部・学科から入学時学科決定ができるだけの情報提供が可能か？
- 大学教育の質保証を厳しくすれば中退率は高くなる
- 私立大学にとっては質保証と学業継続・卒業率アップの両方が望ましい
- 入学者が“割を食う”ことがない仕組みの構築
教育改革、学習支援、初年次教育、アカデミック・アドバイザー（含むIRの活用）、奨学金等の充実強化！

14

中退問題に対するマクロとミクロな対応

- マクロに考えれば
 - ・ユニバーサル化の進行と質保証への圧力で不可避
 - ・現状以上の中退率は不思議ではない
 - ・個別大学や家庭的背景にとどまらない問題の発見が必要
- ミクロに考えれば
 - ・個別大学(特に私立)にとっては抑制したい課題
 - ・原因をどのように特定するか分析が重要
 - ・教育内容・方法の充実
 - ・学生支援と学習支援の充実

15

アメリカにおける初年次教育の変化をヒントに(1)

リテンション(学業継続率＝中退しないで学業を継続する学生の比率)と学生満足度を指標に使って、その効果が論じられ発展してきた。



高等教育の制度と目的、構造、進学者は拡大分化(多様化)と複雑化が進行



評価(Assessment)の必要性が増大



高等教育におけるアウトカム重視

説明責任 (Accountability) + 改善 (Improvement)

16

アメリカにおける初年次教育の変化をヒントに(2)

- ①正規の教育課程と教室内での学修が、(1)アカデミックで認知的なアウトカムという成果を生むという図式
- ②教室外の経験が、(2)心理社会的な(Psychosocial)成長、態度に加え価値変容、倫理的推論につながるという図式



正課内と正課外を分けてとらえるのではなく、①が(1)と(2)の両方に成果をもたらし、②も(1)と(2)の両方に成果をもたらすという複合的な影響を視野に入れた見方が台頭

大学での経験の特徴がどうアウトカムに影響するのかを問う
“教育中心”から“学習中心”へ

17

多元的観点からの中退、学修成果を

- 中退率＝大学の評価 というのは単純発想
- 中退の原因・要因ごとに対応策を構築
- 学生のモニタリングの設計と仕組みづくり
初年次セミナー、アドバイザー、学生ピアサポート、学修行動調査、面談、相談体制
- 学生の属性・タイプ・症状に応じた診断・支援体制づくり
- 中長期的な改善は大学の責任
改善に向けての自己点検
cf.学生支援型IR

18